こども食堂力

新宿ゴールデン街こども食堂

東京都新宿区

酔っ払いの聖域に響く子どもたちの笑い声

2016年4月に、その一角が火災にあった東京・歌舞伎町の新宿ゴールデン街。被災支援に対する恩返しと社会貢献のために、店主たちは「こども食堂」を始めた。

1,2,3,4 9月に開催されたこども食堂。普段は静かな「夜の街」に子どもたちの笑顔が溢れる。

新宿ゴールデン街。戦後の闇市を端緒として生まれ、花街を経て、極小の飲み屋が密集するエリアへと変貌した街。独特のアンダーグラウンドな雰囲気に包まれたこの街は、文学や映画、演劇などに携わる昭和の文化人たちに好まれた街でもあった。

2016年（平成28）4月、若者や多くの外国人が訪れる観光名所として新たな賑わいを見せていたゴールデン街の一角で放火によると思われる火災が発生、鎮火したものの周辺の店舗は休業を余儀なくされた。

被災した17店が加盟する新宿三光商店街振興組合には、全国から見舞金が集まり、火災後の後片付けや掃除など有形無形の支援が寄せられた。

励ましを受けて営業を再開した店主たちが恩返しのために始めたのが、「新宿ゴールデン街こども食堂」だ。

主宰する「Barダーリン」店主の石川雄也さんはいう。

「支援への恩返しとして、なにかできないだろうかと考えていたときに、テレビで各地のこども食堂の活動を詳しく知りました。営業を再開するまでの休業中に、ボランティアでこども食堂の活動に参加して、恩返しをするならこれだと確信し、本格的に活動する前にプレ開催したのが3月です」

有志を募り、店主たち自らが調理したナポリタンやカレーを開店前の店舗で振る舞った。周辺の24時間保育の保育園やプレイパークなどでまいたチラシや、SNSによる告知活動が功を奏し、集まったのは子どもたち30人、その保護者20人余り。

「子どもたちが大人の街であるゴールデン街を飛び回っているというのはいい絵でしたね。喜んでいただき、達成感もありました。支援してくださった方々には大変感謝しています」

こども食堂を主宰する、「Barダーリン」店主の石川雄也さん。

ゴールデン街をよく知り、こよなく愛す人たちが多い半面、近寄りがたい雰囲気のあったこの街に、こうして新しい一面が加わることになった。

以後、ゴールデン街のこども食堂は、2017年5月から毎月、第1日曜日の15時から18時に開催されている。

第5回目の9月には、鎌倉野菜を手掛けている元ゴールデン街店主の支援により、青竹を使った流しソーメン、流しラーメンを路地で実施。鎌倉野菜のナス、紫イモ、カボチャも子どもが喜ぶように調理して供された。10月は山形の郷土食を採り入れた芋煮会。バラエティに富んだ食事の内容からは、食育を意識していることも窺える。折を見て、鎌倉野菜の収穫を兼ねた野外教室なども行う意向だ。

毎回、アトラクションにも工夫が凝らされる。紙芝居の読み聞かせ、ベーゴマ大会、ミニプール……、昭和の雰囲気を色濃く残すゴールデン街の路地は私有地であり、子どもたちは気兼ねなく遊ぶことができる上に、着られなくなった子どもの衣類の交換会も行える。

運営面でもゴールデン街の環境が役立っている。常連客たちが運営費を寄付してくれるのだ。さらに近所はすべて飲食店。食材や料理を差し入れてくれる店主も多い。現役俳優でもある石川さん自身は、アトラクションに力を貸してくれる知り合いの勧誘に余念がない。

「ゴールデン街は過去何度も存続問題が起きています。社会貢献することによってイメージを変える役割も果たしていきたい。有志を増やして、できるだけ多くの子どもたちに来てもらいたいとも思いますが、規模が大きくなりすぎると、運営が難しい面も出てくるでしょう。あまり頑張りすぎず、無理をしないで長く続けることが目標です」

貧困や家庭環境による子どもの孤食が社会問題化して久しいが、抜本的な解決策は未だ示されていない。ゴールデン街が新たなこども食堂のモデルケースとなることに期待したい。

（黒澤　円）

子ども服の交換会も行われている。

取材協力・写真提供＝新宿ゴールデン街こども食堂